2022年7月24日  川越教会

丸山　勉

ノックアウトされて

［エフェソの信徒への手紙4章17節～32節]

そこで、わたしは主によって強く勧めます。もはや、異邦人と同じように歩んではなりません。彼らは愚かな考えに従って歩み、知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れています。そして、無感覚になって放縦な生活をし、あらゆるふしだらな行いにふけってとどまるところを知りません。しかし、あなたがたは、キリストをこのように学んだのではありません。キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだはずです。だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。 だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。悪魔にすきを与えてはなりません。盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。

[１]　「キリストに学ぶ」

 　今日は「エフェソの信徒への手紙」の4章からですが、『聖書教育』が読むように勧めている24節よりもう少し長く朗読して頂きました。本当は4章の1節から見るのが全体を味わうためには良いと思いますけれども、この朝はこの4章の後半の部分をご一緒に味わいたいと思います。

　「エフェソ書」は、印象的な言葉も多く、クリスチャンにとって読みやすい書物の一つだと思いますが、その背景は、この生まれたばかりの教会の中で、外的な誘惑、また内部の交わりの問題では難しいものを抱えていたようです。書いたパウロは、今ローマの獄中にいながら、自分たちが伝道して生まれたこのエフェソの教会のことが頭から離れず、祈りと共にこの手紙を記したのだと思います。

エフェソは地中海沿岸の大きな商業の港町で、アルテミスという女神の神殿が昔からありました。それが商売にも利用されて栄えた町です。神殿では不道徳的なことも行われていた。そのような中で、イエス・キリストこそが真の神だ、物言わぬ偶像ではなく、この私のために十字架にかかり、甦って下さったお方が、今私を愛し、私と共におられる、との福音の言葉を聞き、この異教の地で信仰の共同体・「教会」が生まれたのです。そこでパウロはこの4章17節以下で「わたしは主によって強く勧めます。もはや、異邦人と同じように歩んではなりません」と語ります。いつの時代も異教的なものが溢れている中では、様々な誘惑がありますね。「常識」とか「慣習」と名の下で、いつしかイエス様も、その他の神々と並ぶような存在に自分の中でなってしまう。礼拝に行くことも憚るようになってしまう。でもパウロは言うのですね。「もはや、異邦人たちのように歩むな」と。「もはや」という言葉がいいですね。「もはやあなたはキリストに繋がった存在でしょう？」「もう以前の偶像に思いを寄せていたあなたではない筈ですよね」と。

20節でパウロは「キリストに学ぶ」と言っています。これは大切な言葉ではないでしょうか。信仰というのは、誰か人間が教えるのではないのですね。信仰の解説書を読んで納得することとも違うと思います。（私もこのことを初めの頃分かりませんでしたけれども、いくら信仰についての本を読んでも、自分の生きた信仰にはならないのです）。信仰は「主イエスとわたしの関係」、「キリストごに学ぶ」のです。20節以下をもう一度見てみたいと思います。キリストに学ぶとは何なのかが示されています。―「しかし、あなたがたは、キリストをこのように学んだのではありません。キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだはずです。だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。」

［２］　悪魔にすきを与えないで

　エフェソの信徒への手紙は、「教会」というものがどういうものであるのか、その本質について語っていると共に、教会内の具体的なことについても指摘をしています。

　25節。「だから偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは互いに体の一部なのです」。この「偽りを捨て」という言葉、ここに見え隠れするのは、表面的、形式的な信仰です。外見は良いのですが、語ることとやっていることが乖離してしまう。信仰的に尊敬を受けているような人が陰で人を裁いていたり、真実でない言葉（噂話とか）を語ってしまうようなこと、…これはありがちなことです。でもそれはとても人を傷つけますね。言葉の問題、これはまず誰よりも教会の牧師などが一番心しなければいけないことだと思います。

27節では「悪魔にすきを見せるな」とも言っています。悪魔は‟すき”が好きなのでしょうね。教会が上手くいっているような時にこそその隙に入りこんでくることがあると思います。そのきっかけは様々でしょうけれども、ここでは「怒り」（26節）とか「盗み」（28節）とか「悪い言葉」（29節）がキリストの体である交わりにヒビを入れていく、ということがある。それを警告しているのだと思います。

これらはある意味分かりやすい教えです。しかしパウロは、単に道徳的なこと、皆が仲良く和気あいあいとやっていくようにということを言っているのでしょうか？次元が違うのではないかと思います。次の言葉がとても大事なのではないかなと思いました。30節―「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです」。「教会」には「聖霊」が支配しています。「聖霊」とは何でしょうか？それはパウロ自身も経験した、あの「方向転換」を促す神様の霊だと思います。私たちの歩みが、ある時、神様から「ちょっと待て」とストップをかけられる。「あなたは本当にそれで良いのか、それであなたは本当に幸せなのか」と神様から迫られる大事な時があるのです。

　私は聖書の一つの物語を思い起こしたのですが、それはマルコによる福音書の10章の、金持ちの男がイエス様を訪れ、「善い先生、永遠の命を受け継ぐには何をすればよいでしょうか」と尋ねた時の話です。真面目な男です。所謂モーセの十戒も皆子供のときから守ってきました、と言っています。自信があるのです。しかしイエス様は彼（他の福音書では若い議員）の心根を見抜いて言います。「あなたに欠けているものが一つある。行って、持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば天に富を積むことになる。そしてわたしに従って来なさい」と言います。聖書はこの後、「その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである」と記しています。この後彼はどうなったのでしょうか。イエス様と永遠の別れでしょうか。私はそうではないと思います。21節では「イエスは彼を見つめ慈しんで言われた。あなたに欠けているものがある」となっています。このように言っても良いのではないかと私は思うのですが、**「イエス様の慈しみのまなざしの中で、一度私たちはノックアウトされる必要がある」**と。イエス様に従って歩むとは、鼻高々で歩むことではありませんね。そういう私たちを主は砕いて下さいます。神様の前にはどうしようもない自分、欠けだらけの自分、愛がない自分であるということを教えられながら、それこそキリストに学びながら、赦された罪人として生きていくこと、それがクリスチャンなのだと。

　そこにいた弟子たちも驚いて、それでは誰が神の国に入れるのだろうか、と思ったというようなことが書かれてありますが、イエス様がおっしゃったことが決定的に大事です。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」（マルコ10:27）。そう、私たちは皆神様によって生まれた存在です。ですからこの方は私たちを再創造することもお出来になります。丁度、あのサウロが、天からの光にノックアウトさせられてパウロに変えられたように、また恐れの中で、にっちもさっちもいかなくなっていた弟子たちが、あの聖霊降臨日を境に、イエス・キリストの恵みを大胆に証しするようになったように。パウロはある時語りました。―***「誰でもキリストに結ばれるなら、その人は新しく創造された者です。見よ。全てが新しくなりました」（コリント二5:17）。***聖霊が私たちに注がれているということは、私たちが神の子とされているということです。

［３］ 「贖いの日」を仰ぎ望みながら

　最近、ある宗教団体絡みの話題が多く取り上げられます。（もっともその団体は「カルト」と言った方が良いでしょう）。そしてそのようなカルト的団体とキリスト教会の見分け方は、「強要」「押しつけ」があるかないかです。今日の「神の聖霊を悲しませてはいけません」というみ言葉は自律的な信仰を促す、極めて新約的な、律法を超えた言葉です。もし信仰というものが、ただ上からの命に従い、律法を遵守することであるのなら、そこに起こることは「信仰の格差」「信仰者の上下」、そして他者への裁きです。そこに喜びがありますか。あったとしても、いびつな喜びでしょう。実はパウロはそこから解き放たれた人です。イエス・キリストの恵みに打たれて、「古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされ」た（4:21-22）人なのです。大切なのは「新たになった」のではなく、「された」のです。受け身です。私たちをそのようにして下さったのが「聖霊」でなくて何でしょう。「教会」を形作り、支えているのは聖霊、つまりあのイエスの御霊です。だから安心なのです。私の信仰を誇る必要もありません。わたしたちには「贖いの日」の保証、永遠の命の約束が与えられているのです。日々、主イエスに信頼し、主に学び、聖霊に新しくされながら、ご一緒に歩んで行きたいと思います。隣人と共に誠実に生き、約束されている「贖いの日」を楽しみにしながら！お祈り致します。

愛する主よ、この地上に教会が与えられていることを感謝致します。これはどんなに大きな恵みであることでしょうか！主イエスの十字架と復活の恵みの故に私たちは集められ、あなたを共に讃美する群れとされていることを感謝致します。まことに聖霊を悲しませてばかりいる私たちですが、どうか赦された罪人として、いつもあなたに立ち帰ることが出来ますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。